

「ア、濟まない」と心に耻ぢて「否」と明瞭、母の側に座したがはや眼には涙さへ浮めてゐる。

「可笑しな娘だ子、何したの雪さんは」細い肩に手を懸けた母は氣遣氣に娘を覗くのである。

「お母さん、今日は……今日工賃呉れないの」憫れ遊び盛りの未だ幼い女の兒の早くも世の辛き運命に泣くのである。此一語に母は甚く當惑したが、さりげなく「さう！何好いや子呉れないのぢやなし、先方にも色々都合があるんでせうから」「否さうぢやないのよ、取締さんが大層私消ッたんだッて皆がそう言ッてるワですから呉れるか呉れないか……」又しても沈むのである。母は餘りの可憐さに暫し思案に耽ッてゐたが「オ、左様々々姉さんから手紙が来て居たッけ」姉なる言葉に稍元氣附いた雪子は母が差し出す懐かしい封書に涙の眼を濺いで口元には嬉しい微笑さへ堪へてゐる。「今しがた來たのだけれど、雪さんが歸ッてからと思ッて未だ開けなかつたのですよ」燈近くすり倚るを雪子も可愛い肩を列べて延び上るのである。

一筆示し……濕り勝ちなる今日此頃を、今年も母上様には例の御病氣も起り申さず雪さんもお變りなくお暮しなされをり候由何より嬉う存上げ候。御主

人様始め妾も無事に暮しをり候間御安心遊ばされ度候。承はれば雪さん事過る比より某工場へ通ひ初め候由まことに……悼はしう存じ侍り候。想へば何も涙に候妾事雪さんの年頃は明け暮れ乳母に侍かれ多くの人に醸様よ花子様よと、朝の風夕の雨にも心を配られ恙なく生ひ立ちし昨日迄は雪さんなどの事も及ばぬ女學校に迄振の袂を運び、樂みと面白き事の外は何も知らぬ幸多き身に候らひしを、ア、思へばまこと涙の種に候。父上様みまかり如何に家運衰ひしとは言ひながら姉なる妾は親にも均しきみ情厚き御主人様に御用とて知れた事、勝手元拭き掃除は皆お三の勤めにてほんのお奥の御用のみにて勿躰なき程の氣樂さ、それを未だ遊び盛りの雪さんの此頃は……ア、有難しとも勿躰なしとも昨夜一夜を涙に明かし申候。幼き妹の苦勞を察し候ては一時も心おちぬ足らぬながらも共に御側にあるならば少しは雪さんも慰むべく母上様の御手傳をもいたしたか願ひに候まゝみ情深き御主人様を去るはなかなか忍び難き惱みをいだきをり候。何卒今月限り御暇願ひ下されたく呉れくも願ひ上げ候。別紙爲換は

妾がも小遣の残りにて僅かに候へ共御送り申上候ま

ま雪さんの髪のものにても購い下され度お暇の儀は

ぜひく頼み上げ候。かしこ。

工場に通ふ妹も、奉公する姉も、勤めに二つはなく、何れ苦勞ある身の人の運命、一幅の中に收め來りて、彼や此れや讀者の胸を騒がせる、例のごとく小説には望みある筆。(選者評)

しと、自分で自分を可笑しむ顔の、出張つた腮は剃あ

と青い。と紺足袋に雪駄を穿つた足があまりに踏ばた

がつて居るのに氣が付いて、左の手に毛をこする剃刀

の隙を、大急ぎで直す、序でに曲つた前掛をも。折か

ら脊の高い茶斑の犬、のそりと現はれて、のそりと消

えた。

「長さんは如何してゐるんだい……」

「亞米利加へ往つたッけ」

「へ？若旦那の事ですか、ちやあ

お前さん未だ知らねえんですね」

「何を？」

「死んぢやまいやしたぜ」

「えつ、何日……」

「何日つてお前さん、もう廿日にも

……そら……早いものでさ、今日

は丁度三七日ですよ」と切爐の灰を

撫で、居た女房が、指を繰つて見て

お高祖頭巾

岩代 服部 水仙子

「イヨ、酷く別嬪さんが通……」

途端、グイと顎をあげられたので、

語尾は咽喉へ引込ひてしまふ。三十

男の頭を分けて、双子の筒袖羽織を

着た具合は、何處か商舗の通ひ番頭

といふ見得。



「……仙長の嫁さんでさあ」剃刀を持つた儘、反り返つて硝子戸越し、今隣りは呉服店、天水桶の陰にならうとした後姿を見送つて、主人の早言葉。

「彼女が？あの小夜さんとか謂つた」と今更に鏡の面を覗き込んだが、表に止まつて居る人ぢやあるまい

口を挿んだ。

「へ、え、少も知らなかつた、尤も其頃なら留守な時

だつたがね」と鏡に寫る主人が不格好な顔を眺めなが

ら白衣の下に着物を幾枚着てゐるかを數へて居る。

「全躰若旦那の彼の體で勞働なんて無理なんてさあ、

「お可哀さうに仙臺屋の若旦那ともあろう者が、亞米利加くんたりて骨になつちまふなんて……其れも此れも皆あの後妻のためでさあね」

「また大旦那も大旦那でさ、いくら勝手に飛び出したんだからつて鑑一文仕送り仕ねえなんて、それで彼の次男にはから目が無しさ、へん文學士が聞いて呆れらあ若旦那があゝした事になつたのも、つまりはあの野郎のお陰なんてさあ、あのお小夜さんを自分のに慾しがつたんで……あのお小夜さんであ、死んだ御新造の姪に當つてるんです。それが思ふやうにならなかつたんで、其後つてものは婢と二人でお小夜さんに當り散らす、苛める、遂々心弱い若旦那あ見るに見兼ねて、己が居なかつたら彼等此様と優しい手紙とお小夜さんに残して其儘亞米利加さ、可愛い女房を義弟に呉れるつてんでさ、寧ろ未練が無い様にの心なうしてらう可愛そらに」

若者が小聲のラツバ節もいつか止むて皆靜に耳を傾けて居る。四間間口の岬床、暫くは髪刈器の音、鏡の響爐の縁、開き過ぎた福壽草のかげには大猫がさも心地宜さそらに睡つて居る。

「お小夜さんも感心さあね、若旦那があゝなつてから

出入二年になるのにあゝして指一本觸れさせないで居るんだもの、それだのにお可愛そらに……眞實にあの葬式の時なんざあ、お氣の毒と言つていゝか何て言つていゝか……」と女房がしみく云ふ。

「そらよ、さすがは小針様のお嬢様だわな、悼しい、お若けいにあのお髪をよ」

「眞實にそうですよ、此様仕つちやつたんですよ」と持つて居た煙管で鬘を切る眞似して見せる。

「それに如何ですえ、可愛さ増つて憎さが百倍ですわ、云ふことを聞かばよしだつたのが、そらなつたもんだから……お小夜さんも意地になつたんでせう……遂々離縁ですとさ、それも呆れるぢやないか未だ一七日も過ぎないうちの話なんですと」

「せめて廿一日過ぎる迄はとお小夜さんが頼みに頼んでもう今日が廿一日でさ」女房が猶も言ひ續け様とした時。

「や來やしたよ！」と若者の聲。言ひ合さずに表に皆目を向けた。さる程に、心強かるとも見えぬ吾妻コト姿嬌々と、打見たところ二とは越えない、さぞや香の香の染みて居るであろうと思はるゝ手先に一寸袖口をからめて、捲つて、鬘に高かるべき空色縮緬のお高

祖頭巾は、まことひとつそりと。夫の墓前に、花を手向けて、香を焚いて、今日を限りの別れの涙はさぞやと合掌のぬかづき姿しのぼする伏目勝ち。やがて影は見えなくなつた。

「あゝあの姿も今日限り見るとが出来ないのかねえ」

さすがに女、女房はほろりとした。

過失で溢れたやうに、霰はハラ／＼と降り出した。

技巧に於ては申分ない、是れ位筆が立てば立派なもので、上手に任せて氣取らなかつたら、世を動かす作を成す事も難くない、君はもう或る鍵を握つて居るのであるから、藝苑の扉を開いて自由に其技倆を試みてよい、只つゝしむべきは小才に任せて小成功に甘んじる弊である。(選者評)

田打車

岩代 大竹いそ子

今しもとある茅葺の家から、田打車を肩にして出た、二人の姉妹がある、姉は十八位の櫻色で、白い手拭を姉様冠りにかむつた様子は、大さうやさしい姿である、妹も姉によく似て年の頃は十四五である。折からさし上る朝日は大さう鮮かに、田の面の稻の先に宿つて居る、露に映じて、何にも譬へられぬ善い心地である。

かくて二人は、次第に作場道の方へ行つて、田道を通り東の方へ急いだが、やがて自分の田と思しところから車を下し、堤に腰を掛けた「たみちやん一寸休んでから始めませうね」と姉が云ふと「はい」と答へて、二人はむつまじく語り初めた。しばらく休んで仕事に取りかゝつた。姉は妹を慰め顔に「百姓はほんとにすべの職業の本だわね、之を嫌がる人は愚だわ」と云つた、すると妹も「ほんとにさうですわ、あのね學校の先生もさう仰しやいましたのよ私一生懸命に働いて大きくなつて人の世話にならなうて暮して行かなければならぬと思ひますわ、」すると姉は「たみちやんさうなくてはなりませんよ」と語り合ひながら、車を以て田の水の中をがぼ／＼させて働いて居る中に日はもう高く上つて、水も次第暖り、玉なすあせはぼたぼた落ちて来る。又着物は雨も降らないのに皆たらたらにぬれて終つた。木立には蟬の鳴く聲が喧しい、とからする中に、寺の鐘がゴーンと鳴つた。二人は暑くて堪へられぬといふと、いそ／＼として車をかついで、鐘が鳴り止むと、いそ／＼として車をついて我家をさして歸るのである、その途中仲よく語らつて遠やかに歌を歌ふ聲、又「オホ、ハ、ハ」と笑ふ聲も聞